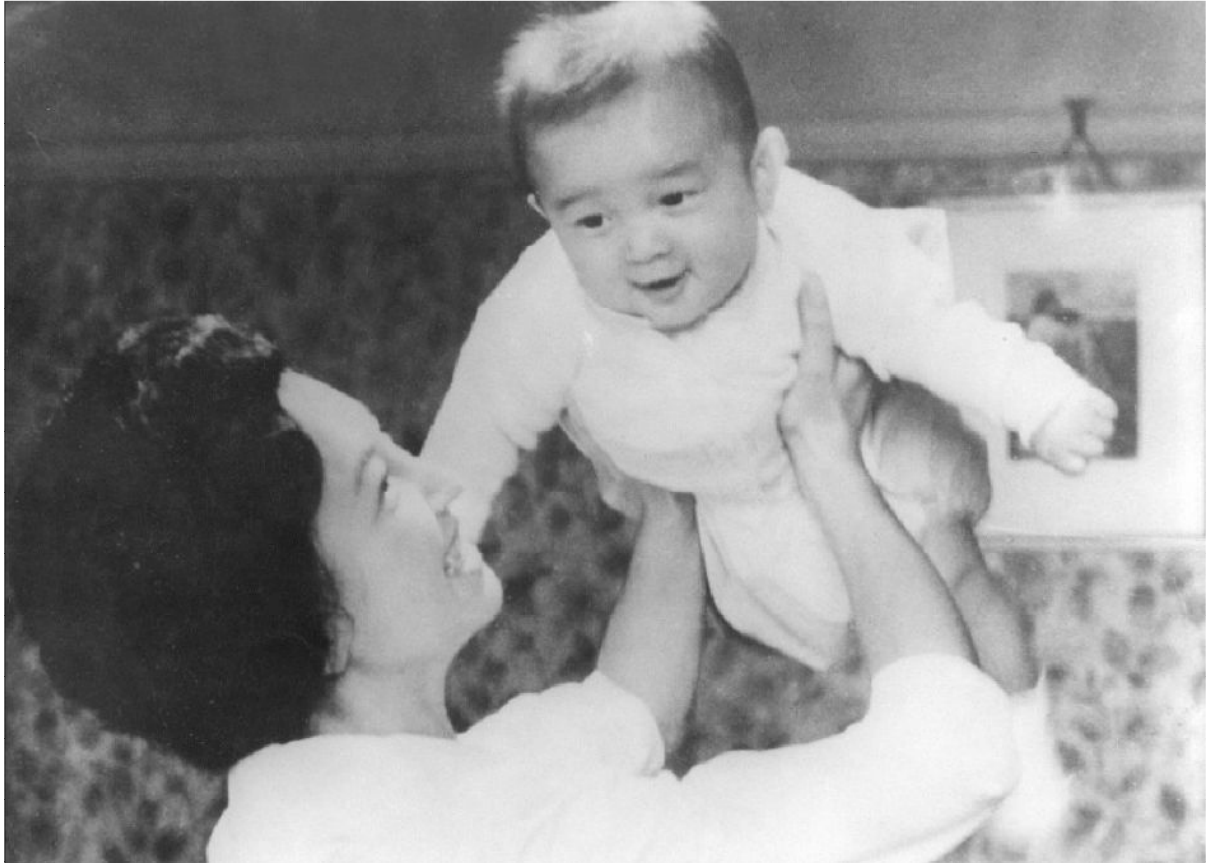


## 令和フィーバー考

# 美智子さまの「良妻賢母」像が隠した女性蔑視 牟田和恵氏

毎日新聞 2019年5月18日 15時00分（最終更新 5月18日 16時40分）



浩宮さま（現天皇陛下）を抱っこする美智子さま＝宮内庁提供

令和への改元の際、天皇ご一家の来し方が多く報道された。仲むつまじい家庭の様子が描かれることが多かったが、ジェンダーや性差別の問題を研究してきた大阪大大学院の牟田和恵教授は「上皇后、皇后について『良妻賢母』としての女性像が繰り返し発信されることで、皇室や社会に残る女性蔑視が隠れてしまった」と話す。【江畑佳明／統合デジタル取材センター】

### 社会的活動には焦点当たらず

「新聞やテレビは改元一色でしたが、今考えるべき肝心なことが報道されていませんでした」と、牟田さんは語り出した。

「肝心なこと」とは何か。まずは天皇家の女性が置かれた立場だという。

上皇后美智子さまは皇太子妃当時、親子が別々に暮らしていたそれまでの皇室のしきたりを破り、自分たちで子育てをするスタイルを皇室に持ち込んだ。美智子さまが自らキッチンに立つ姿などが報じられ、国民に皇室の新しい雰囲気を感じさせた。



鹿児島県名瀬市（現・奄美市）の国立ハンセン病療養所「奄美和光園」を訪れ、入所者と歓談する美智子さま＝鹿児島県名瀬市で2003年11月16日、潮田正三撮影

でも、と牟田さんは言う。「美智子妃は専業主婦というわけではなく、ハンセン病施設の訪問や各国首脳との親善などの社会的な活動も多々ありました。しかし、こういった社会貢献よりも『優しく愛情あふれる母親』、つまり『良妻賢母』像が求められていた感は否めないと思います」

## 対人地雷廃絶に取り組んだダイアナ妃

美智子さまはハンセン病患者との交流だけでなく、子どもへの図書普及活動にも情熱を注いできた。

そして牟田さんは、英国王室の例を挙げた。故ダイアナ妃は対人地雷廃絶に取り組んだことで知られる。その活動は各国の政権を動かし、対人地雷全面禁止条約（オタワ条約、1997年）調印への機運を高めたとされている。「もし美智子妃のハンセン病に関する活動が、ダイアナ妃のように大きく報道されていたら、強制的な隔離被害にあった患者の救済がより早まったかもしれません」と指摘する。

## 女性が天皇になれないのは大きな差別

新皇后雅子さまについても、元外交官としての経験を生かした活動より、「母」としての役割を期待する人々がいた。愛子さまの誕生を報じる2001年12月の毎日新聞の記事は「お子様誕生の環境作りにとって、外国訪問はマイナスだった」という宮内庁関係者の言葉を伝えている。また04年には天皇陛下（当時は皇太子）が記者会見で「雅子のキャリアや人格を否定するような動きがあった」と発言、波紋が広がった。牟田さんは「雅子妃も社会的な活動よりも、良妻賢母という役割を求める圧力の中で葛藤があったのでは」と推測する。

また、言うまでもなく、現在の制度では女性は天皇になれず、牟田さんはこれが大きな女性差別だと訴える。「改元という機会にもかかわらず、女性天皇をはじめ、皇室の女性差別を見直すような議論はほとんどされませんでした」と残念がった。

## 皇室のあり方と日本社会は不可分

牟田さんが視線を向けるのは皇室のあり方にとどまらない。「皇室の女性差別は、日本社会に存在する根強い女性差別や蔑視の裏返しでもあります」

平成30（2018）年には、夫婦共働き世帯の数が専業主婦世帯数の2倍以上となった。社会で活躍する女性が増えたにもかかわらず、女性たちの多くが差別に悩まされているという現実も浮き彫りになった。

17年にはジャーナリストの伊藤詩織さんが性暴力の被害を訴えた。18年は福田淳一財務事務次官（当時）の女性記者に対するセクハラが表面化。複数の女性が「フォトジャーナリストの広河隆一氏から性被害を受けた」と訴えた。また医大や医学部の入試で、女性の受験生の点数が減点されるなど、不正に操作されている実態も明らかになった。

## 被害者が声を上げにくい日本社会



「#MeToo」の横断幕を掲げ、ハリウッド中心部を行進するセクハラ被害者ら＝米西部カリフォルニア州で2017年11月12日、長野宏美撮影

セクハラを告発する米国発の運動

「#MeToo（私も被害者）」も米国ほどの大きなうねりになったとは言い難い。なぜだろうか。牟田さんは「日本では『セクハラや性暴力、女性差別は許されない』という社会規範が十分でないからです。実名で被害を告白した伊藤さんらは激しいバッシングを受けた。そのような二次被害が起きる社会では、被害者が告発の声を上げにくい」と指摘する。「社会全体のデフォルト（基本状態）として、『女は余計なことをするな』という意識があると思いますね」

だが、希望の芽を感じることもあるという。

それは新聞などの世論調査で女性天皇への賛否を問われると、過半数の人が「賛成」と回答していることだ。「日本社会にも、女性天皇を受け入れる基盤ができつつあります。その空気が新しい天皇一家に何らかの影響を与え、また天皇家から新しい女性像が発信されるかもしれません」

## むた・かずえ

1987年、京都大大学院文学研究科博士課程退学（社会学専攻）。佐賀大、甲南女子大の助教授などを経て、2004年から現職。専門はジェンダー論、歴史社会学。著書に「部長、その恋愛はセクハラです！」「ジェンダー家族を超えて」「戦略としての家族」など。



大阪大大学院の牟田和恵教授 = 本人提供

---

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。  
画像データは（株）フォーカスシステムズの電子透かし「acuagraphy」により著作権情報を確認できるようになっています。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.